



Title	津田左右吉の日朝文化交流史論
Author(s)	一瀬, 陽子
Citation	大阪大学言語文化学. 2006, 15, p. 29-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77887
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

津田左右吉の日朝文化交流史論*

一瀬 陽子**

キーワード：単一民族神話、邪馬台国論争、比較文化論

This essay discusses the Japanese intellectual Sokichi Tsuda (1873-1961) and his essay, which he contributed to a monthly magazine called “Sekai” (world) in April, 1946. Some people are of the opinion that it inevitably discussed political issues, while others argue that it was the origin of “the Japanese myth of homogeneity.” This articulates the thought that Japan had been maintained as an Empire for a long time, and had never been invaded by its neighbors. The origin of the “Japanese myth” has been explored in the ancient historical studies of the Empress Jingu’s story in Kojiki and Nihon-shoki or archeological studies, never in the debates on ancient country Yamatai that closely related to the theory of Empress Jingu. This is not an ancient historical study, nevertheless, although this is a study of Tsuda’s theory, it analyzes in greater depth the content of the ancient published historical studies.

To be precise, Tsuda’s theory as a whole is not the origin of “the Japanese myth of homogeneity.” Until recently, his works have been highly evaluated as presenting a typical theory that defies the authenticity of Empress Jingu’s story. Few recognized his theory, which includes a thesis that Empress Jingu’s story was based upon the invasion that occurred during the 4th century. Further, Tsuda referred to the Kyusyu area as a part of “Japan”; it was a center for cultural exchange between Kyusyu and Korea since the Before Christ era. This thesis is very different from that of his teacher Kokichi Shiratori, who was deeply committed to the traditional debate on the ancient country of Yamatai. It is crucial to determine the boundaries of the state of Yamato if the Japanese emperor is concerned about “the Japanese myth of homogeneity.” Therefore, we examine the debate on Yamatai and find a thesis that the Kyusyu area was not a part of “Japan” during the 3rd century, i.e. the state of Yamato had not yet been unified with Kyusyu.

During the latter part of his life, Tsuda stated that his theory on Kojiki and Nihon-shoki

* Sokichi Tsuda’s historical theory of cultural exchange between ancient Japan and Korea (ISSE Yoko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

had been misinterpreted. The misinterpretation originated around the time of the 2nd World War. After the war, Japanese historians were surprised at his essay in “Sekai”(world); Tsuda's prewar works were very different from those that the historians considered as “historical science”. Scholars who majored in ancient history attempted to criticize the ancient class society because the debate on Yamatai was proving inconclusive. They were only concerned about the class society existing in the state of Yamato in the Kinki region; therefore, they unconsciously promoted “the Japanese myth of homogeneity.”

They assumed the ancient “naturalized Korean people” to be slaves. Although Tsuda himself disliked Asians, he regarded them as respectable people among the ancient Japanese society. We can now assume his work can be repositioned as a study of comparative cultures, since both countries have mutual respect for each other's cultures.

1 はじめに―「建国の事情と万世一系の思想」をめぐる問題

津田左右吉（1873－1961）は「日本歴史の研究に於ける科学的態度」という論文を雑誌『世界』1946年3月号に発表し、次いで同年4月号に「建国の事情と万世一系の思想」という論文を雑誌『世界』に発表した。後者の論文は当時の『世界』の編集責任者であった吉野源三郎に深刻な政治的反響を憂慮せしめた。それは、津田自身の天皇愛が現れていたためであったし、GHQ原案による憲法が公布される以前に「象徴」としての天皇像が盛り込まれたものとして注目されてきたからでもある。

この論は一方で、戦後歴史学の生み出したナショナリズムと共に「単一民族論」として批判されてきた。「単一民族論」とは何か。小熊（1995）は、「単一民族神話」という言葉を「単一純粋の起源をもつ、共通の文化と血統をもった日本民族だけで、日本国が構成されてきたし、また現在も構成されているという観念¹⁾」と定義し、「単一民族論」を、そうした観念の現れた論という意味で用いている。また、網野（2004）は、「天皇を頂点とする国家」である「日本国がさまざまな変転があったとしても現在まで存続しつづけ、この国家の成員である日本人―『日本民族』は、周辺の諸民族による決定的な侵略、征服を受けることなく、独自の歴史的発展をとげ、現在にいたった」という観念²⁾を言う。だが、このように過去における天皇を中心としたヤマト国家像や民族像によって現在・未来の日本を「単一民族」としてとらえる観念を問題にすると、その論証過程には、よく引かれる神功皇后伝説のみならず、表裏一体の学説である邪馬台国論争がかかわってくるはずである。このことは従来問題とされてこなかった。

¹⁾ 小熊（1995）p. 7.

²⁾ 網野（2004）p. 55.

確かに津田論には「単一民族論」と呼べる側面はある³⁾。だが、1946年4月のこの論文は、「単一民族神話」生成過程のなかで、それほど重大な役割をはたしたのだろうか。津田は、過去に侵略・征服を受けなかったことを理由に、日本民族が「一つの民族」と説く⁴⁾。近年においても、「異質な他者を想定しない同質社会という前提を疑わずに『公共性』を構想し続けた⁵⁾」という批判される津田の学説は、ナショナリズムを孕んだ「単一民族論」として一様に批判されるべきなのだろうか。

本稿は津田の学説とその影響力に関する研究であり、古代史研究に寄与するものではない⁶⁾。小熊（1995）の学説理解の問題点を指摘し、ついでその背景について論じる。津田と共に「単一民族論」に傾いていたとされる戦後歴史学による古代日本像と、津田の古代日本像の違いを明らかにし、そのような日本像のちがいが生み出した津田の学説解釈の偏向を指摘したい。朝鮮史の領野において、大正期に発表された朝鮮半島の歴史地理研究よりも、記紀研究が評価される傾向にあり⁷⁾、学説解釈の偏向はあったのではないかと考えられる。この作業によって、津田の古代に関する学説を、日朝文化交流史論、もしくは比較文化論として再評価する可能性を模索したい。

2 小熊（1995）検証

2. 1 「倭」と朝鮮半島の文化交流について

津田は、1902年の歴史教科書において、馬韓・弁韓・辰韓という3つの地方に分かれていた朝鮮半島南部の民族について、「此の民族は對岸なるわが大和民族と最も密接の關係を有す。事は國史に詳かなり⁸⁾」としていた。小熊（1995）において、この時期の津田の研究が「混合民族論」と呼ばれているのはこの記述によるものであったろうが、その後、小熊（1995）のいうように変貌を遂げたのであろうか。

津田は、魏志倭人伝に書いてある「倭」というのが「ツクシ人」あるいは「ツクシ地方」のことだとしており、前漢書の記載に依拠して、「ツクシ人」は前漢時代（202 B.C.

³⁾ 日本「島国」論や、日本人が平和な農耕民族である点においては、津田の論は「単一民族論」である。

⁴⁾ 津田（1946）p. 39.

⁵⁾ 田尻（2003）p. 21.

⁶⁾ 今井（1988）が述べたように、「津田史学理解（受容）のあり方」は、今や津田研究にとって欠かせない主題である。特に敗戦後という時代を考えると、津田の学説の圧倒的な影響力はそれ自体が文化研究の対象となる。今井は、従来の津田研究のほとんどが「(イ)敗戦直後によく見られた、『世界』論文が契機となって津田の天皇制論・皇室論の戦前・戦後の変化（があるとして）の指弾(ロ)戦後における津田の時事評論、マルクス主義史学批判に併行して、主としてマルクス主義史学の陣営からなされた津田史学的方法的限界、戦前・戦後を一貫する帝国主義思想の批判 (ハ)戦後の津田を否定的にとらえず、戦前・戦後の津田の思想の一貫性の強調」のうちどれかに当てはまるとしている。従来(ハ)の見方に立つ論者はあまりに少ない。本稿の立場も(ハ)に当たるが、戦前から戦後という時代背景を考慮して、(イ)(ロ)の無数の論を批判することを目的とする。

⁷⁾ 末松（1949）pp. 5-6.

⁸⁾ 津田（1965）p. 508.

一7 A.D.) からぼつぼつ朝鮮半島の楽浪地方に交通しはじめたとしている⁹⁾。邪馬台国九州説をとった津田は地名の類似から、「筑紫の山門都」を邪馬台国と位置づける(津田のいう「ヤマト」は通常、朝廷のあった畿内の「ヤマト」である¹⁰⁾)。その上で津田は、「我々の民族の重要な一部分を形づくるツクシ人の歴史が、毫も記紀に現はれてゐない」ことを理由に、記紀の物語が「我々の民族の上代史」ではないと述べていた¹¹⁾。また、1936年には、「日本民族」の筑紫地方との文化交流をのべ、前漢書で「倭人」と呼ばれた、紀元前のこの地方の人々を「筑紫地方の日本人」と呼ぶ¹²⁾。戦後にも、「我々の民族の上代史」という表現は変わらない¹³⁾。この地方が日本であるという以上、朝鮮半島とヤマト民族との関連を述べた1902年の論断が動くことはない。

2. 2 古代における侵略

さらに小熊(1995)は、記紀の神功皇后伝説の「すべてが空想の物語」であることにより、「自動的に日鮮同祖論と、天皇家に朝鮮系の血統が流入したという説が否定された¹⁴⁾」のだという。「天皇家に朝鮮系の血統が流入した」ことを否定したというのは正しいが、津田は記紀研究に際して「混合民族論」を放棄したのか。小熊(1995)では、1910年に主流だった「日鮮同祖論」に特有の記紀解釈として、「神功皇后の半島侵攻」、「任那日本府の存在」などがあげられ、「日鮮同祖論」の大部分が、日本と朝鮮に古代から侵略を含む相互交通があったと考えていることなどがあげられている¹⁵⁾。

神功皇后の物語について津田は、1913年初版の『満鮮歴史地理研究』において、「我が國の對韓政策は是より漸く活動の端を開き、任那日本府の基礎または是によりて鞏固となりしも、新羅の叛服一ならずして、我が國は屢之に對して遠征の軍を出し、こと國史に明記せらるゝところなり¹⁶⁾」と述べている。韓国併合を経て「単一民族論」に変化したというのは、小熊の定義からすれば誤りである。津田が「任那日本府の存在」を認めていたのを見逃しているからである。

津田にとって神功皇后の物語は「事實の記録または傳説口碑から出たものでは無く、よほど後になつて、恐らくは新羅征討の眞の事情が忘れられた頃に、物語として構想せ

⁹⁾ 津田(1919) pp. 26-27. 以下では、津田説の戦前と戦後に隔たりを見る家永(1972)をはじめとする説に配慮し、改訂版がある場合は改訂版からも引用し、改訂版の頁を併記する。特に断りがない場合、改訂版でも全く表現が同じであることを意味する。

¹⁰⁾ 掛川(1976) p. 645. この史料は津田の出版法違反事件法廷における口述筆記である。

¹¹⁾ 津田(1919) p. 31.

¹²⁾ 津田(1936) p. 8.

¹³⁾ 津田(1948) p. 21.

¹⁴⁾ 小熊(1995) p. 282.

¹⁵⁾ 小熊(1995) p. 87, 95. 津田は、三国志の新羅本紀の史料価値を否定し、「倭人の新羅王」として「日鮮同祖論」の根拠とされていた脱解伝説を作られた物語だと説いた。この意味では、津田は「日鮮同祖論」を否定したと言って差し支えない。

¹⁶⁾ 津田(1964) p. 127.

られたもの¹⁷⁾」であった。記紀の記述を補う傍証として「三国史記の新羅紀」と「高句麗の廣開土王の碑文」(1919年版では「好太王碑文」)という史料を参照し、前者の史料は信用できないことをのべ、西暦391年から399年の間に「倭人」が新羅へ渡り「潰城也」とかかかれている「廣開土王の碑文」を「確かな史料」とみなした上で、364年もしくはそれより少し前に「威歴」がはじまったと説く¹⁸⁾。

「すべてが空想の物語」という言葉を文脈なしに理解すると、津田の4世紀後半の事実に関する説を見逃してしまう。小熊(1995)は侵略を相互交通の一種だというのが、そう考えるなら、津田を「日鮮同祖論」の論客でないというのはおかしいことになる。

では、上記のような誤りは、単に小熊による「単一民族神話」もしくは「日鮮同祖論」という言葉の定義の問題にとどまるものなのか。以下では、津田の3世紀から7世紀までの古代日本像とその周囲に着目する。

3 「神代史」と「上代史」の間

3. 1 邪馬台国とヤマト朝廷——国家観をめぐって

「混合民族論」と「単一民族論」をめぐっては、神功皇后伝説をめぐる学説がよく引き合いに出される。津田説に関しても、彼の説が「単一民族論」である論拠として、この伝説に関する津田説が引かれるけれども、神功皇后伝説に関する学説は、表裏一体の学説である邪馬台国論争との関連で捉えなければならない。なぜなら、畿内説では伝統的に、邪馬台国はヤマト朝廷そのものだと思われてきたし、また魏志に出てくる九州地方の百余の国家がヤマト朝廷といかなる関係だったかを示す史料がなく、これらの国家とヤマト朝廷との関連がさまざまに論じられてきたからである。

3. 1. 1 神功紀の位置づけと「神話」

津田の神功皇后に関する学説は、過去においてどのように理解されてきたか。例えば坂本太郎は1938年、神武天皇紀以後の記事を「大體史實とする態度」は、「あまりに完全に津田博士と對蹠的」であり¹⁹⁾、津田にとって虚構の説話は「全く事實と關しない²⁰⁾」と疑問を呈していたことは注意してよい。坂本は、明らかに誤りである「津田博士の説」に対して批判を述べていた。

津田は、日本書紀の編者が神功皇后を描き出すさい、「ヤマトの朝廷では昔から女帝は無かつたから、皇后を以てそれに擬したのも怪むに足らぬ。神功皇后の親征が史實であ

¹⁷⁾ 津田(1919) p. 143./ (1924) p. 170./ (1948a) p. 108. 版により若干表現は異なる。

¹⁸⁾ 津田(1919) pp. 135-137./ (1924) pp. 163-166./ (1948a) pp. 104-107. 神功紀と朝鮮史料との対照によって、366年頃からを事実とみた池内(1947)とほぼ同じ説である。

¹⁹⁾ 坂本(1938) p. 47.

²⁰⁾ 坂本(1938) p. 45.

るかどうかは、此の點をも顧慮して考ふべきである²¹⁾」という。ここで津田はヤマト朝廷に神功皇后が存在したことを否定はしていない。津田は、古事記の方が、皇后の行動が神教に背いている日本書紀と違い、事実そのままでなくとも物語の原形に近いといていた²²⁾。邪馬台国論争との関連で捉えるならば、津田の批判は、畿内説が伝統的に日本書紀の記述を信用していたことへの批判に繋がるものだといっている。

だが、津田の記紀研究の影響力は、あまりに大きすぎた。津田は彼自身の意図を超えたところで「日本神話」研究者として賞賛されるに至り²³⁾、津田の主たる仕事は史料価値の否定だととらえられがちになる。前に述べた小熊の誤りもここに原因がある。記紀の物語は史料価値を否定されるべきものだという価値観によって、日本書紀の人代の物語すら、後の世の修飾を受けたものはすべて「信用できない」という言葉のもとに切り捨てられ虚構とされた²⁴⁾。坂本の論は第二次大戦中のものだが、それから戦後古代史家は、神功皇后伝説を「故意の創作」とであると²⁵⁾、また津田説は神功皇后の物語を「虚構の物語」とする説の典型とした²⁶⁾。戦後しばらくして、神功皇后は「架空の人物」となる²⁷⁾。「単一民族神話」生成の責はここにも帰せられることになる。

3. 1. 2 「事實」の意味と古代国家観

邪馬台国論争の文脈においては、魏志を引いた日本書紀の記述にしたがい神功皇后と卑弥呼を同一視すると、魏志において狗奴国で「女王」が没し、壹与がそのあとを継いだという記述との整合性がつかなくなる。このことは邪馬台国の地理に関する魏志の矛盾とならんで、邪馬台国九州説と畿内説を生じさせる原因となり、どちらの説も根拠が乏しいために、推測や想像が膨らんだ。

津田は、「實際、魏志によると、三世紀に於いてツクシ地方は政治上、それよりも東方の勢力に服屬してゐないことが明であり、さうして此の状態は、溯つては少くとも後漢時代、即ち一、二世紀に於いて、また下つては少くとも、邪馬臺の勢力が晋に貢獻を繼續してゐた時、即ち三世紀の終に近い頃まで、同様であつたと推測せられ、其の推測を妨げる何物も無いのであるから、此の地方は三世紀以前に於いては、ヤマトの朝廷によつて統一せられた國家の組織に入つてゐなかつたと見なければなら²⁸⁾」ないという。

²¹⁾ 津田 (1924) p. 178./ (1948a) p. 114.

²²⁾ 津田 (1919) p. 100./ (1924) p. 139./ (1948a) p. 90.

²³⁾ 拙稿 (2005b) 参照。

²⁴⁾ 井上 (1952) p. 31. 津田の影響を大いに受けて始まったのが、1951～52 年にかけて行われた幸徳紀の大化の改新詔勅の信憑性に関する論争である。

²⁵⁾ ねず (1949) p. 200.

²⁶⁾ 竹内 (1948) p. 47.

²⁷⁾ 植村 (1950) について、直木 (1959) も神功皇后非實在説をとり、津田説への批判の形で、神功皇后の物語と 4 世紀末の史実との関係が希薄であることをのべる。

²⁸⁾ 津田 (1919) p. 30.

この説は 2.1 で論じたように、津田は 3 世紀以前、紀元前の「ツクシ地方」をも日本であると述べていたことと矛盾するかに見える。だが、これは必ずしも津田にとっては矛盾ではない。なぜなら、「彼等（註：ヤマト朝廷の古事記述作者）は卑彌呼を彼等の住んでゐるヤマトを統治してゐた昔の女王だと思つてゐたのであらう²⁹⁾」からである。津田の考えでは、海外との交渉の深かった卑彌呼は、ヤマト国家に住む人々にとって過去の女王だった。津田は自分なりに過去のヤマトの人々と同じ立場に立ち、この地方を「日本」と呼んだ。津田は、過去の人々の思想を「歴史上の事実」と位置付けたのであらう³⁰⁾。

津田の九州説によって見出された古代日本像は「歴史上の事実」の意味からして二面性がありつつも、すくなくとも国家統一以後に関しては、「日本」＝ヤマト国家は、九州にある文化の進んだ国家による中国・朝鮮との人や物の交流を視野に入れた³¹⁾国家であると見なければならぬ。たとえ 3 世紀以前の畿内を中心とした津田の論断を「単一族論」と呼ぶとしても、その萌芽は邪馬台国論争が始まった江戸期に遡らなければならない。九州説、畿内説を問わず、「邪馬台」をヤマトと読んだことは、多かれ少なかれヤマト国家中心主義を育てる原因となったからである³²⁾。

3. 2 古代社会像——階級と「科学」

九州説とちがって畿内説は、古墳の出土をめぐって邪馬台国、さらにはヤマト国家について想像力がひしめき合う場となる。昭和に入り、魏志倭人伝の方位の記載をめぐる九州説と畿内説の対立は、マンネリに陥りかけていた。戦後歴史学の論客は、考古学の成果を積極的に取り入れようとした。結果的に、津田説は恩師白鳥の邪馬台国論争と、その後の古代社会史論をつなぐ役目を果たした。津田は敗戦後の邪馬台国論で多くを語らなかったが、とにかく九州説を擁護した彼は、「史蹟に必ず考古學的のうらづけができるとは限るまい³³⁾」という見解を示していた。

3. 2. 1 「奴婢」

1946 年 4 月の論文は、天皇と民衆の階級対立のない平和な古代日本社会像を描き出していたが、これをうけて戦後、津田はなぜ天皇を専制君主として見ないのか、という不

²⁹⁾ 津田 (1924) pp. 177-178. / (1948a) p. 114.

³⁰⁾ 思想の表現は「歴史上の事実」であるというテーゼについては、拙稿 (2005a) 参照。

³¹⁾ 津田 (1919) p. 38. 津田は応神記の「照古王」の記事を朝鮮史料との対照によって事実とみなし、百済とヤマト朝廷の交通を事実と認めた。古事記の記載に一部事実性を認めた津田説が理解されていなかったことは、津田説の文化交流史論としての価値が軽んじられていたことを示す。

³²⁾ 古田 (1993) では、三国志の魏志倭人伝の表記は「邪馬臺国」ではなく、「邪馬壹国」であり、九州説・後漢書中心主義の伝統によって読まれたことの政治性が指摘されている。

³³⁾ 津田 (1948) p. 5. 同じ雑誌に載せられた白鳥庫吉のものが前半だけで 50 ページを超える量なのに対し、津田の邪馬台国論はたった 6 ページで彼の「考はほゞ盡くされてゐる」た。この邪馬台国論争への無関心は、藤間 (1950) も指摘している。

満の声が噴出する³⁴⁾。この理由を読み解くには、彼の古代社会史論と、マルクス主義史学による古代社会史論の違いに遡らねばならない。

『日本歴史教程』では、大化の改新時の「奴婢」と「部民」は「被征服者」であった³⁵⁾。津田は大化の改新研究において、「奴婢」は「ヤツコ」つまり「家つ子」の意味で、「家々で親しく使役せられるものゝ稱呼」とし、改新の第一の目的を私有地民の解放に見るが、それは元々自由民であった「部民」の解放を意味しなかった³⁶⁾。津田は戦前の著作で、「近ごろの社會史經濟史的考察³⁷⁾」の階級闘争史観を批判していた。彼の社会史論は、マルクス主義の社会史論とはかなり異なっていた。

3. 2. 2 「科学」と天皇

戦後、マルクス主義の史家たちは、彼の天皇賛美に過敏に反応し、津田に対する「憎悪³⁸⁾」やとまどいの感情を共有した。以前はマルクス主義史学を中心とする「左翼の人々」は、津田を「科学的歴史家」として高く評価していた³⁹⁾はずだが、なぜ急に評価を下げてしまったのか。ここで、上のような大化の改新研究の論断が、1939～40年の出版法違反事件によって発禁処分となった『上代の社會及び思想』のなかにあったという事実に着目する必要がある。マルクス主義史家は、起訴以前には『神代史の研究』『古事記及び日本書紀の研究』を「社會科学的把握が弱い⁴⁰⁾」としていたが、敗戦をへて、過去の「日本古代史の科學的研究」の例として、「大正中期から昭和初年間に現れた津田左右吉博士の四冊の大著、『神代史の研究』、『古事記及び日本書紀の研究』、『日本上代史研究』、『上代日本の社會及び思想』⁴¹⁾」を挙げているのは注目に値する。津田が「科学的歴史家」であるのは、上記の記紀批判によってのみなのである。

では、渡部のいう「社會科學的把握」の弱さとはなんだったのか。『日本歴史教程』の思想と方法は戦後歴史学に受け継がれたが、そこでは天皇制の抑圧のせいで古墳の発掘

³⁴⁾ 石母田（1947）など多数。編輯者（1946）では当時の『世界』編集長吉野源三郎の「建国の事情と万世一系の思想」への驚きが語られ、その後1950年代にかけていわゆる講座派のメンバーや共産党員から轟々たる非難を受けた。羽仁五郎は、今このような論文を発表すべきでない主張した[吉野（1973）]。また、網野（2001）は、後述する「皇国史観」をめぐる、1946年3月と4月の津田論に明らかな矛盾を見ているが、津田と直接話した吉野の見解に従う限りそれは誤った見方である。

³⁵⁾ 渡部・伊豆・秋澤・三澤（1937）pp. 178-179.

³⁶⁾ 津田（1933）p. 427, 436. この論断は「正倉院文書」によるもの。

³⁷⁾ 津田（1933）p. 458.

³⁸⁾ 李（1987）。なお、この論文は津田の説が「任那日本府」をみとめず、4世紀における朝鮮出兵を史実としていなかったという「誤解」を示すものとして典型的である。1950年代知識人の天皇制とのかかわりは、小熊（2002）第5章参照。

³⁹⁾ 編輯者（1946）p. 131.

⁴⁰⁾ 渡部・伊豆・秋澤・三澤（1937）p. 483.

⁴¹⁾ 林（1946）p. 23.

が出来ず、それが卑弥呼の研究が進まない原因と考えられた⁴²⁾。邪馬台国九州説をとった津田は、魏志の記述と大化前後の史実を容易に結び付けなかったが、マルクス主義に影響された7世紀に関する古代社会史論は、魏志にある、卑弥呼と一緒に埋葬された「奴婢」がどこに埋められたかという問題を引きずらざるをえなかった。戦後歴史学では、畿内から出てきた古墳はそのまま古代における階級の論理となる。外から侵略を受けなかったことが階級分化の原因とされ、ヤマト国家が国内の闘争と海外からの文化摂取によって統一されたことが強調され、「ついに『仁徳』という一人の王のために世界最大の墳墓をつくるまでにいった」ことが批判的にとらえられる⁴³⁾。マルクス主義に影響された古代社会の「科学的把握」とは、古代日本の社会制度を奴隷制として捉えることではなかったか。戦後歴史学の「単一民族論」は、このように学説の形をとりながら、政治性から離れえなかった。一方、津田にとってのヤマト国家は奴隷制国家ではありえず、同じく「単一民族論」といっても、両者の学問的認識は全く異なっていた。

3. 3 「帰化人」と廣開土王碑文

「一つの民族」論を説いた津田は、そもそもどのような意味でそう言ったのか。津田は、「倭」を吸収した朝廷の中で、「いつのころにか、そのうちの或るもの（注：中国人）が、百済から支那の文物を取入れることに熱心であつた日本に、歸化したとしても、不思議は無い。それは同じ意味に於いて百済人の歸化するものがあつたのと違ひは無く、又それに促がされてのことであつたと思はれる。けれども、歸化人が多数の民衆を率ゐて來たといふのは（略）あり得べからざることである⁴⁴⁾」といい、上代の「部」の中に「帰化人」の存在を認めた⁴⁵⁾。「一つの民族」という言葉に、マイノリティであったところの朝鮮半島からの「帰化人」がふくまれている。日本国の成員のマジョリティが「日本人」であると見なす論を「単一民族論」と定義する限り、マイノリティの存在は「単一民族論」を根底から覆すことにはならない⁴⁶⁾。

だが、津田にとっての「帰化人」の位置付けは独特であり、その「単一民族論」の意味は、半面において戦後歴史学とは違うものといわねばならない。戦後歴史学をはじめ、廣開土王碑文（好太王碑文）に史料価値をみる論者は、そこにかかれた新羅侵略の記事をよりどころに、ヤマト朝廷の朝鮮人を、あるいは「捕虜となった半島人」⁴⁷⁾、あるいは

⁴²⁾ 藤間（1950）p. 104.

⁴³⁾ 藤間（1951）p. 268.

⁴⁴⁾ 津田（1936）p. 17.

⁴⁵⁾ 津田（1928）pp. 64-67

⁴⁶⁾ 小熊（1995）p. 8.

⁴⁷⁾ 渡部・伊豆・秋澤・三澤（1937）p. 179.

は「部」の中で隷属した者と捉え⁴⁸⁾、天皇に隷属した者と同一視した。だが津田は、「ヤツコ」の由来が、征服もしくは捕虜とした異民族を奴隷としたことにあると考えることの誤謬をのべ、「韓人はむしろ尊重せられてゐた⁴⁹⁾」と述べたのである。

津田が日記で朝鮮人を蔑称で書いていたことはよく指摘されるし、それはアジア諸国への配慮を欠いたもので、それは未来に日本の同質性を志向する「単一民族論」だったが、一方、戦後歴史学は、古代日本の階級対立が古代日本人の主体性によって止揚されるさまを描き、津田とは別の意味で周辺民族への配慮を欠いた「単一民族論」を育てた。

ヤマト朝廷に「帰化人」の存在を見出す見解は、のちに金達寿によって「皇国史観」と批判される。金は、伝統的に価値が認められてきた高句麗の廣開土王碑文が明治政府の手が加わった可能性があるものとして、その史料価値を否定した⁵⁰⁾。4世紀の新羅侵略を史実だとする侵略史観だという意味の「皇国史観」であり、この観点からいえば、津田とて「皇国史観」のもちぬしであるが、金が家永三郎について指摘するとおり、戦後歴史学の論客も同じだった。

津田は、古代朝鮮人を侵略によって無理に連れてこられた人だと見ていたわけではなかった。「帰化人」という言葉に問題はあっても、津田の見た古代社会は、そのような「韓人」との共存社会であった。

4 おわりに——比較文化論の可能性

津田は2回にわたって「誤解」された。出版法違反事件で弾圧されたときの当局の見解は誤ったものであり、津田の意図は、史料価値を否定することで、天皇の存在を否定したというわけではなかった。むしろ発禁となった著書の中で、平和で、天皇と民衆の階級対立のない古代日本社会を想像していた。国家権力と戦った「科学的歴史家」として津田を評価しようとしたマルクス主義者は、1946年4月の論に驚きを禁じえなかったが、それは彼等の想像した古代日本像と、津田のそれが全くちがったものだったからであった。すなわち、彼らの古代日本像は止揚されるべき奴隷制社会であったが、津田説は戦前から全く反対だったのである。1939～40年にかけ、津田が政治的弾圧を受けて「誤解」されたとすれば、津田はマルクス主義の立場にたつ史家によってまたも「誤解」されたというべきなのである。この「誤解」は未だ続いている。津田は神功皇后の存在まで否定したわけではなく、日本書紀の史料批判は、むしろ邪馬台国論争における九州説支持の態度を示したものだだった。

津田の古代社会像と戦後歴史学のそれは、大きく異なる。両方を「単一民族論」の一

⁴⁸⁾ 井上 (1949) pp. 38-39.

⁴⁹⁾ 津田 (1933) p. 440.

⁵⁰⁾ 金 (1972) p. 87.

言で定義するのは、少し無理があるのではないか。史料の取捨によってイメージする古代社会像は大きく異なってくるものである。「単一民族論」が一口に批判されねばならないものだとすれば、津田の想像したような天皇と民衆対立のない平和な古代日本社会像のみならず、戦後歴史学の想像した奴隷制社会としての古代日本社会像や、すべてを階級闘争史観に還元する方法も批判されなければならないはずなのである。また、「単一民族論」が敗戦後に形成されたというのは、満州を植民地としていた第二次大戦中、日本は「島国」でなかったという意味でもある。だが、「単一民族論」は江戸期から存在した。「単一民族神話」をヤマト国家の天皇の存在と不可分のものとするならば、津田の論はその起源ではない。

そもそも津田説には二面性があった。津田説はヤマトを中心とする「単一民族論」であり、かつ北九州の邪馬台国を文化的に進んだ国家として捉え、3 世紀以前の北九州の人々をも「日本人」とよぶことで、「混合民族論」の側面を併せ持っていた。このような津田の古代日本像、また戦後歴史学のそれに関しても、古代の正しい像を示していたかどうかはここでは問わない。ただ、戦後歴史学による「単一民族論」の中には、古代における「部」の奴隷としての朝鮮人が含まれていた。その学説が生み出したナショナリズムは、第二次大戦中の朝鮮人強制連行の反省を経て、在日朝鮮人の帰国政策につながっていった。

いま津田説から抽出せねばならないのは、アジア嫌いの感情ではなく、彼の見た古代朝廷における「韓人」であろう。廣開土王碑文の史料価値が否定され、戦後歴史学が反省を促されている今、支配関係ではなく、対等の関係性を見出した津田説に着目すべきである。このように理解してこそ、津田の学説はいま比較文化論として再評価することができる。比較文化論としての津田の学説は、比較対照される双方の文化が尊重される土壌の上に立ち、すべてを階級闘争史観に還元しないという点において、範としうるものであろう。

※本論は、大阪大学文学部 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」研究プロジェクト「イメージとしての〈日本〉」主催の若手研究者ワークショップにてディスカッションされた内容に加筆修正を加えたものである。

《引用文献》

津田左右吉『古事記及び日本書紀の新研究』（洛陽堂、1919）

——「上代の部についての補考」（『史学雑誌』40 編 1 号、1928）

——『古事記及び日本書紀の研究』（岩波書店、1924）

- 『上代日本の社會及び思想』（岩波書店、1933）
- 『岩波講座 東洋思潮 日本文化と支那及び朝鮮の文化との交流』（岩波書店、1936）
- 「建国の事情と萬世一系の思想」（『世界』4月号、1946）
- 『日本古典の研究（上）』（岩波書店、1948a）
- 『津田左右吉全集』11巻（岩波書店、1964）
- 『津田左右吉全集』23巻（岩波書店、1965）
- 渡部義通・伊豆公夫・秋澤修二・三澤章『日本歴史教程 第二冊』（白揚社、1937）
- 坂本太郎『大化改新の研究』（至文堂、1938）
- 編輯者「津田博士『建国の事情と萬世一系の思想』の發表について」（『世界』4月号、1946）
- 林基「日本古代史學の傳統一肥後和男氏の所論によせて一」（『歴史評論』1巻3号、1946）
- 石母田正「政治史の課題」（『歴史評論』6号、1947）
- 池内宏『日本上代史の一研究』（近藤書店、1947）
- 竹内理「書評：池内宏『日本上代史の研究』」（『日本歴史』11号、1948）
- 末松保和『任那興亡史』（吉川弘文館、1949）
- ねずまさし『日本全史』（暁明社、1949）
- 井上光貞『日本古代史の諸問題：大化前代の國家と社會』（思索社、1949）
- 『再び大化改新詔の信憑性について』（『歴史地理』第83巻2号、1952）
- 植村清三「神功皇后は果して架空の人物か」（『日本歴史』20号、1950）
- 藤間生大『埋もれた金印』（岩波書店、1950）
- 『日本民族の形成』（岩波書店、1951）
- 直木孝次郎「神功皇后伝説の成立」（『歴史評論』104号、1959）
- 金達寿『古代文化と「帰化人」』（新人物往来社、1972）
- 家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』（岩波書店、1972）
- 吉野源三郎「津田先生と天皇制の問題」（『世界』337号所収、岩波書店、1973.12）
- 掛川トミ子編『現代史資料42 思想統制』（みすず書房、1976）
- 今井修「戦後における津田左右吉関連文献（十）」（第2次津田左右吉全集23巻月報、岩波書店、1988）
- 李進熙「津田史學の克服と日朝關係史」（第2次津田左右吉全集12巻月報、岩波書店、1987）
- 古田武彦『「邪馬台國」はなかった』（朝日新聞社、1993）
- 小熊英二『単一民族神話の起源』（新曜社、1995）
- 『＜民主＞と＜愛國＞』（新曜社、2002）

網野善彦『歴史としての戦後史学』（日本エディタースクール出版部、2001）

——『日本論の視座—列島の社会と国家』（小学館、2004）

田尻祐一郎「『国民』という思想—津田左右吉をめぐって」（『季刊日本思想史』63号、2003）

一瀬陽子「ある知識人の表象—津田左右吉をめぐる『古代史学』と『古代文学』—」（『言語文化プロジェクト2003 表象と文化Ⅰ』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科、2004）

——「津田左右吉にみる戦前と戦後の間—『科学』をめぐって—」（『言語文化学』vol. 14、大阪大学言語文化学会、2005a）

——「津田左右吉における『神代史』と『神話』—国文学・神話学・歴史学のはざままで—」（『言語文化プロジェクト2004 文化の解読（5）』大阪大学大学院言語文化研究科、2005b）